

日 時：令和2年7月21日

場 所：市役所地下会議室

梅田委員

- 中高一貫の教育によって子どもや保護者の選択肢を広げることができる。
- 議論の積み重ねもされてきていることが見られるので、中学校の設置を決定し、一つ一つ前に進めていってほしい。
- 附属中学校での教育を市内の中学校に共有できる仕組み作りを、懇話会の議論も含めて検討してほしい。実際に附属中学校の開校を迎える段階で、教育の中身が見えている状況でスタートが切れないといけない。

畑中委員

- 昨日見た探究活動は、生徒自身の中から意見が引き出されているものであった。
生徒が主体的に学ぶ姿勢が一条高校で定着しつつあると感じることができた。それが附属中学校にも求められていくのだなと思った。
- 高校とともに、中学校の段階から生徒が主体的に学ぶ取組をおこなってほしい。
- 中高6年一貫の中学生段階の精神面、心のケアもしっかりとしていかないといけない。
- 設置の意義をしっかりと認識して、子供たちや保護者、学校へ意気込みをもって説明をしてほしい。

都築委員

- 新しい形の教育が選択肢に入ってくる意義は生徒たちにとって大きい。それも公立の中高一貫で学びができるのは大きなチャンスである。
- 高校の探究活動でも、答えのない課題に対してしっかりと取り組んでいた。中学校の早い段階から柔軟な発想をもった生徒たちの個性を伸ばしていく教育をしていくことはいいこと。そこに一条に中学校を設置する意義がある。
- 高校からの入学生の教育にもうまく生かされるような学校づくりを是非してしてほしい。新しい学びが取り入れられると学校全体が変わっていく。

柳澤委員

- 小学校を卒業した生徒たちを中学校の学びから教えていけることが高校の先生にとって新たな魅力となる。
- 一条中高が他の中学校のモデル校となるような、附属中学校の取組が共有できるようにしてほしい。6年間であるからできるのだということではなく、例えば6年一貫の中学3年生の部分は他の中学でも共有できるようにしていくことが課題であると思う。
- 懇話会での有識者からの意見はポジティブな意見だけでなく、かなり厳しい視点での意見も言ってもらわないといけない。
- 一貫校としての取組、学校評価を外部から評価してもらえるような仕組みづくりも必要。学習指導要領のこの先の改訂も見据え受け身にならない形をとって進めることが校長先生たちの一つのミッションだと思う。

教育長

- 6年というスパンで継続してみることができ、受検がないことでゆとりをもって深い学びができる。
- 6年一貫でメリットがある一方、デメリットもある。例えば、6年間環境が変わらないこと。中だるみが生じてしまうこと。これらを注視して、カリキュラム編成をし、生徒の成長に目を配って、学校環境、人間関係をしっかりと構築できるような体制づくり、面倒見の良い学校になることが大切。中高の教員が一緒になって子供を一緒に見ていかないといけない。
- 高校を卒業した時に出口は生徒たち自身が思い描いた通りであるようになってほしい。
- 小中一貫に加え、中高一貫をすることで、小～高の大きな接続ができ、奈良市の特色ある教育となっていく。
- 一条中学校で学んだ教員が他の中学校へ転校していく事で奈良市の教育も活性化できる。
- 保護者や子供たちに魅力ある、そして分かりやすい内容で今後説明していただいたい。